

除に向かう戦勝軍であります。大きな川を渡るときは日本軍と中国軍は昨日の敵は今も友、呉越同舟のことがありました。一人の日本語をよく話す中国軍の将校が、自分たち若い兵隊に声をかけてくれました。

西峡口の攻防戦で若い兵隊の君達が実に勇敢に戦ったことをほめてくれて感激しました。中国軍は私たち侵攻で日本軍の五倍も十倍もの犠牲を出していることを考えると、初年兵の胸はつまる思いがしました。洛陽の駐屯地に着き武装解除を中国兵から受けて、翌年三月まで、この地で捕虜生活をしました。

蒋介石から私たち若い精鋭の兵隊に対し、中国再建のため中共作戦に使用しようとする誘いがありました。しかし、しばらくして連合国のポツダム宣言の主旨から、これを蒋介石はあきらめざるをえず、私たちは全員復員することになりました。

やっと無事に復員しました。亡くなった戦友には気の毒でしたが、平和になって晴れて先祖伝来の平和産業である百姓ができることは幸福でした。

## 長城線に戦って

愛知県 天野 章 一

私は昭和十八年一月八日、周囲四、五キロの真冬の篠島からただ一人、前浜で島民の皆様を送られ、関東軍の一兵士として出発しました。家は貧しい漁業で一家は祖母両親姉妹で十人でした。私が入営したら後の生活は、幼い弟妹のめんどうはと、本心に心配でした。

名古屋に伯父・伯母がいて一泊、松江市内の八束町というところに父と弟に送られ入隊しました。

当時、島では雪などみたくもないのが、松江に入隊したらとつぜんの寒さ、毎日雪か雨で夕方演習終了後、古参兵の下着、靴等の洗濯と掃除に頑張りました。本当に風邪などひくひまもなく、お国のためとつらい毎日でした。

夜の一品検査、兵器の検査等少しでも落度があれば、スリッパ(皮)でなぐられ、消灯ラップでようやく寝か

せてもらう毎日毎夜でした。松江に入隊三か月で、軍隊の厳しさが本当にわかり、心身ともに一人前の軍人になる基本が身につきました。

三月初旬、松江市民の皆様から一人五十銭の餞別を頂き、旧満州の吉林省の第二独立守備隊の一兵士として出発しました。当時、現北朝鮮の金日成の朝鮮独立軍の討伐に参加、吉林の大隊本部から私たち三中隊は熱河省に出発、サンチャコウの山中に転戦し、翌年三月までに遠くは万里の長城を越え、中国山西省までの三か月ぐらいの行動でした。一回出動して帰隊すると、体重も一人五、六キロくらいへっていました。毎日兵士一人十キロ近い背負袋を背負い、雨の日も雪の日も朝早くから夜間の行軍で、身体の弱い戦友を助け、共に死の行軍です。とくに私たちは靴などはいったこともなく、足は靴ずれで赤く皮がむけ、食糧も定められた食事以外になく、とくに生水は絶対飲ませてもらえず、連日、山また山の頂上への行軍、戦闘とただ気力のみでした。

当時の軍隊生活を思えば現在の青年達は幸福と叫びます。衣食住の満ちたりた生活、平均寿命の点については、

世界一とのこと、この様な世界の経済大国日本にしたのは我々の先輩等戦死された人々の力と、戦後の復興に努力された国民一人一人の力だと思えます。

十九年三月末、満州から北海道を経由し北千島の占守島に転属となり、北方の守りにつきましました。

雪の千島は、毎日食糧のない北の島の生活で寒さと飢えに耐え、ひたすら国のため、家族のためと頑張りました。

この生活で私の人間性はかわりました。耐え忍ぶ心がこの軍隊生活で人一倍出来たと私は信じています。宗谷海峡で米軍の潜水艦に沈められたときの戦友の顔、波間に浮かんだ戦友の姿、本当に戦争はいやだ、本当に負け戦さはみじめだと、身にしみました。

当時の日本の食糧難、勝つまではほしがりませんと、芋や野山の草、海草何でも口に入る物は食べて生活しました。当時の生活を思えば現在の日本の姿をみる限りなんとせいたくなと将来を考えさせられます。つらい戦争を思えば大国です。二度とあのような戦争はいやです。